

を射たりと云傳ふる事によりてさ、やかなるの矢なれば楊弓とはいふなるべし。○中其起原は唐玄宗に始れるよしいへるは取にたらず、

〔本朝世事談綺三態〕楊弓

芝撮しはつかみ かの五郎未碩○兩人並元祿時がなす所也、矢をつまむに食指を曲て撮むに、芝撮は食指を伸てつまむ也、矢のぬけ心よしと專傲ふ、

〔楊弓射禮蓬矢抄〕凡矢數者以二射從中古爲四、是表四季以五十度爲百手也、

凡雖中的有期聲之時不用之、

凡矯矢卒發過一間則不能射改不過六尺則再令射之、以之爲常法、

〔楊弓射禮蓬矢抄追考〕楊弓射様の事

抑楊弓の射やういろくありといへども、習なくして射るときはたとひ矢數おほく中るとも、金貝の射手常住金貝ならず、泥書の射手常住泥書ならず、席毎に不同ありて、終には矢數おちて、朱書もならず、是習得ざるがゆへ也、能ならひ得て射こむときは、常住さだまりて矢數おつることなし、他流は去らず、予○今井が流といふは、先弓矢の拵やうに口傳あり、一々道理をせめて造れり、扱楊弓を射るに第一心持あり、假にも散亂の心あるときは、中ることなし、心を鎮め氣を煉して、他へ心氣をうつさず、一念に一矢一矢を大事にすべし、一度のうち一矢はづる、は、わづかのやうなれども、百手にかさなる時は、大きな違となる、先左の膝を的のとをりにむかはせ、右の膝を期の左の足のとをりにむかふと心得べし、弓をとり矢を番るにも、心まづかにして、つまみの所、百手ともにおなじやうにつまむべし、押手のかた、左の大指を附の右のかどへかけ、左へ押出すやうにすべし、左の人差指を附にのせて矢臺にすべし、是を指臺といふ、残り三つの指はうきものにて、すこしもりきむべからず、右の付人々の勝手ありといへども、先は親指を右の鼻